

が、私達は従来の諸肝機能検査に加えて RIA 法によるグリココール酸(CG)測定をルーチン検査項目とし、その肝疾患診断における有用性について検討した。

1) 血中 CG 値および従来の諸肝機能検査のうち、1 項目以上の異常値を認めた 413 名を対象に、血中 CG 値と GOT, GPT, T-Bil, r-GTP, Ch-E との相関をみると、各相関率はそれぞれ 0.386, 0.397, 0.889, 0.693, 0.521 で、T-Bil と最も良い相関を得たが、GOT, GPT との相関率は低い。

2) 2, 3 の臨床例の検討から、血中胆汁酸は従来の諸肝機能検査とは異なった局面から、肝疾患の活動性をより鋭敏に反映するため、血中胆汁酸と他の肝機能データとの解離を適確に把握することにより、i) 血中胆汁酸の動きが肝疾患の急性期における予後の判断の一助となる、ii) 外来での食前食後に関係ない胆汁酸のワンポイントのチェックで、従来の諸肝機能検査では見逃し易い潜在性の慢性肝障害、ならびに肝疾患急性増悪期の早期診断の一助となる可能性がある。

3) 以上の点およびその肝疾患に対する特異性、RIA 法による測定手技の簡便性から、ルーチン検査としての血中胆汁酸測定の臨床的意義は大きいと考えられる。

22. 肝・胆道系診断薬 ^{99m}Tc -N-ピリドキシル-5-メチルトリプトファンの臨床的検討

大竹 英二 松井 謙吾 池上 匡
朝倉 浩一 小野 慶 野沢 武夫
氏家 盛通 (横浜市大・医, 放)

^{99m}Tc -N-ピリドキシル-5-メチルトリプトファン (PMT と略す) の臨床的有用性について検討した。対象は健常志願者 2 例と各種肝・胆道疾患 10 例の合計 12 症例で、平均年齢は 50 歳であった。検査は空腹時に PMT 3~4 mCi 静注し、Searle 社製 PHO/GAMMA LFOV により 3 分毎の連続イメージを 60 分まで撮影し、同時に Varian 社製コンピュータシステム VARICAM II へ入力、データ解析を行なった。さらに、必要に応じて 90 分から 6 時間後までの撮影を追加した。血中クリアランスは PMT 静注、4 分、6 分、10 分、15 分、30 分、60 分後に採血し、4 分時の血中放射能値を 100% とし、その半減時間を求めた。また、90 分までの投与量に対する尿中排泄率の検討を行なった。健常志願者 2 例の検討では従来の ^{99m}Tc 標識肝・胆道系放射性診断薬に比較して、早期に胆道系のイメージが描出でき、血中クリアランス

は速く、尿中排泄率は少なかった。肝・胆道疾患例の検討では総ビリルビン値 8.1 mg/dl の肝腫瘍例で明瞭な胆道・陽管の描出がみられ、さらに、白血病の肝浸潤によるためと思われる高ビリルビン血症(総ビリルビン: 24.9 mg/dl)の症例においても静注 270 分後のイメージで胆のう描出をみた。また、本症例では E-HIDA によるイメージとの比較を行ったが、肝へのアイソトープ取り込みは明らかに PMT の方が良好であった。副作用は 12 例全例に認められず、PMT は臨床的に十分使用でき、有用な薬剤であるとの結論をえた。

23. 肝シンチグラフィ仰臥位像との比較

丸山 雄三 三浦 慶和 中込 俊雄
小堺加智夫 (東邦大、医・中放、核)
佐々木康人 戸張 千年 黒沢 洋
(同・放)
野口 雅裕 (同・内)

肝シンチグラム像が被検者の体位と検出器の位置により異なることは Winston, Mettler, 油野、今枝らが指摘している。われわれは ^{99m}Tc フチン酸による肝シンチグラム 100 症例について、前面像仰臥位像と坐位像の差を比較検討した。

位置の指標として剣状突起 (a) と肝右葉下端 (c) より肝左葉下端 (d) 距離を計測した。右葉上端 (b) と、c, d との距離、肝横径 (e-f), プラニメータで測定した面積 (S) を大きさの指標とした。形の変化、欠損像描出程度も評価した。

位置の変化: a-c は臥位 9.4 ± 3.5 cm ($\bar{m} \pm 1SD$) (範囲 0~19), 坐位 12.8 ± 4.3 (2~25) で各症例毎の差は 3.6 ± 2.8 であった。a-d は臥位 5.4 ± 2.9 (0~13), 坐位 10.0 ± 3.9 (0~23), 症例毎の差 4.5 ± 3.0 で、坐位で肝が下降するものが多かった。

大きさの変化: b-c は臥位 14.7 ± 2.6 , 坐位 15.1 ± 2.5 , 症例毎の差 0.6 ± 1.8 . b-d は臥位 11.0 ± 1.9 , 坐位 12.1 ± 2.1 , 症例毎の差 1.2 ± 1.6 であった。e-f は臥位 18.8 ± 2.3 , 坐位 19.1 ± 2.3 , 症例毎の差 0.4 ± 1.3 , S は臥位 $180.6 \pm 33.0 \text{ cm}^2$, 坐位 $199 \pm 39.6 \text{ cm}^2$, 症例毎の差 19.6 ± 21.2 と坐位で大となるものが多かった。

形の変化: 著明な変形 26%, 軽度~中等度の変形 52%, 不変 22%, 兩葉の変形 41%, 右葉主体 17%, 左葉主体 20% であった。欠損像描出は 8 例が坐位で明瞭、8 例が不变だった。